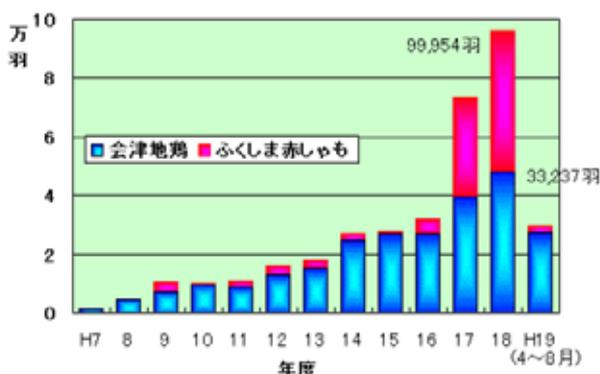


# 畜産研究所だより

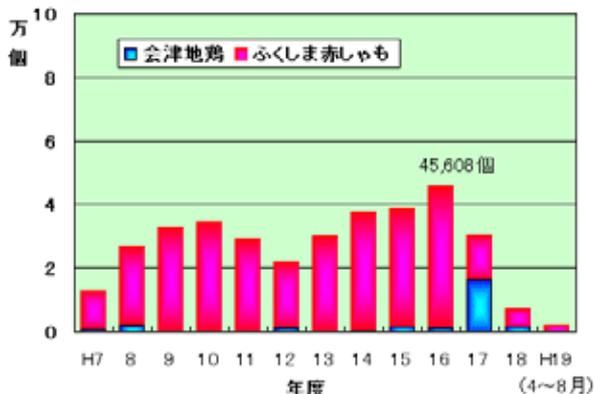
## 養鶏分場で開発した肉用鶏雛と種卵の譲渡推移について

養鶏分場(旧養鶏試験場)で開発した鶏のうち、肉用鶏として、「会津地鶏」と「ふくしま赤しゃも」があります。これらの肉用鶏は開発以来、種卵や雛で県内全域に譲渡し、地鶏のPRおよび普及を行ってきました。この度、それら譲渡羽数の推移をグラフにまとめたのでご紹介します。

( 雛譲渡羽数の推移 )



( 種卵譲渡個数の推移 )



グラフで示されるとおり 会津地鶏は主に雛として、ふくしま赤しゃもは主に種卵として譲渡してきました。昨年平成 18 年度は、どちらも初生雛譲渡が主となり 会津地鶏で約 4万 9千羽、ふくしま赤しゃもで約 4万 8千羽を譲渡しました。養鶏分場からの出荷のかたちに違いはあるものの、いずれも、地鶏としての肉や卵の需要が年々順調に伸びてきていることが分かります。

会津地鶏は、昭和 62 年に南会津地方で発見された純系の会津地鶏を素に平成 4年度開発しました。純系会津地鶏は小軀で産卵性が少なく、発見当時は絶滅寸前だったそうです。しかし今では、肉用に開発された会津地鶏が前述のとおり多く生産され、地域の特産品として活性化に役立っています。また現在、生産～販売の体制整備が積極的に行われており、今後も大きく増羽していく見込みです。



(純系の会津地鶏 ・ 肉用会津地鶏の素材鶏)

ふくしま赤しゃもは、美味と定評がある軍鶏を素に平成 8年度に開発しました。軍鶏は貴重な鶏で、天然記念物にも指定されています。その軍鶏から開発されたふくしま赤しゃもは現在、川俣町内でふ化・飼育・販売まで一貫して行われ、「川俣シャモ」の名で大変好評を得ています。また、去る 8 月 25 日の川俣シャモまつりでは世界一長い焼き鳥(18.18 m)作り成功。話題をよびました。



(世界一長い焼き鳥達成の日 上はジュニア選手権!!)

いずれの地鶏も、今後も新たな面を展開していくことと思います。  
(養鶏分場 泉田)

## 高雑草率草地の簡易更新

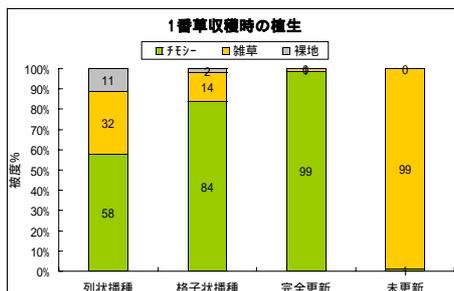
現在県内には阿武隈山系を中心に23カ所の公共牧場(放牧17、採草6)が存在しています。平成18年度にそれらの公共牧場に対して行われた県衛生飼料グループの調査では、当面の課題として下記(上位3課題)の問題点が挙げられています。

1. 簡易な草地更新技術等の導入による採草量の安定化(8牧場)
2. 株立ち、裸地化、鳥獣被害等による草勢の悪化(7牧場)
3. 施肥等による適正な草地の維持管理(6牧場)

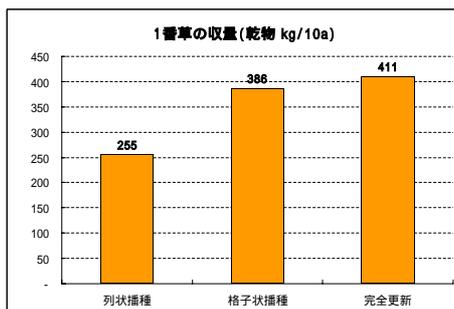
これらはすべて草地利用に共通する問題点であり、更新等による草地の植生改善技術の開発・普及が強く求められていることが窺えます。

このような状況下、近年開発された簡易草地更新機の役割が期待されています。しかし、雑草が多く進入した草地では通常の簡易更新は行えません。また一方で、ブラウ等を用いて完全更新するにも、表土が薄く石礫の多い場所では、それも難しいのが現状です。

そこで、最終草収穫後に非選択制除草剤を散布して前植生を駆除した後、簡易草地更新機を利用する方法を検討しました。その結果が下のグラフです。簡易更新機の通常の播種方法(列状播種)は、除草した後に行くと地面の露出部分が多くなり、雑草が進入しやすくなることが分かりました。しかしそこで格子状に播種すると、播種量は同じでも播種面積が倍になるため雑草の進入が少なくなりました。収量も格子状播種は完全更新と遜色ない結果となりました。



これにより雑草の多い草地でも、簡易かつ効果的に更新することができるものと期待されます。



(沼尻分場 前田)

## 狭小圃場でも細断型ロールベアラ?!

畜産経営を取り巻く情勢は厳しさを増す一方です。その一例として、バイオエタノールへの需要増加に伴う配合飼料価格の高騰が上げられます。こうした背景の下、飼料用トウモロコシ栽培による高栄養価自給飼料の増産に期待が寄せられています。

しかし、飼料用トウモロコシは収穫調製に多大な労力と人員を要することから、ここ数年作付面積は減少傾向にあります。細断型ロールベアラを用いた、狭小圃場での収穫調製技術について研修会が開催されましたので、その内容について紹介したいと思います。

本来細断型ロールベアラは大規模圃場用に開発されているため、ハーベスタと連動した作業では8m以上の枕地確保が必要とされています。

しかし今回は、福島市内の酪農家Aさんの協力により、25aという狭小圃場での収穫作業実演を行いました。作業体系は自走式コーンハーベスタでの刈り取り後細断し、トラクタに装着したバケットで受け、定置の細断型ロールベアラに細断されたトウモロコシを投入するという方式をとりました。作業時間や手間は細断型ロールベアラ本来の作業体系に比較して余分にかかりますが、基本的にハーベスタ、バケット、細断型ロールベアラ、自走式ラッピングマシン、4台のオペレータ4名以外の人員は必要としません。

この研修会は、細断型ロールベアラは大面積圃場でしか利用できないのでは?という考え方を考える良いきっかけになったと思います。機械はあくまでも道具です。道具は利用する人によって様々な使い道が出てきます。今回のように視点を変えて工夫を凝らせば、身体にも経営にも優しい自給飼料の増産が可能になると期待されます。



(飼料環境グループ 中村(フ))

## フィリピン畜産学会大会開催

去る6月30日と7月1日の2日間、耶麻郡猪苗代町において、JICA 青年海外協力隊・フィリピン畜産学会（JOCV-PASA）が開催されました。本学会はフィリピン政府の農業省職員、獣医師、畜産技術者、研究者と青年海外協力隊畜産隊員及びそのOB等で組織され、フィリピン畜産業の発展をめざして活動・研究している非営利組織です。いわゆる学会としての研究発表の場を提供するだけでなく、獣医師や普及員のいないフィリピン全土の山奥や離島へ赴き、畜産農家に対する技術指導、人工授精、駆虫、ワクチン接種、臨床診断、牛乳普及による幼児食生活改善等を実施しています。そうした活動が認められ、社会発展に尽力する世界的優良団体として、2004年にはJICA理事長表彰も受賞しています。

今年は当学会の設立20周年を迎え、これを記念して定例の学会大会を、受入研修者数が最も多い福島県で開催することになりました。福島県畜産試験場は1976年以降、フィリピン人畜産研修生だけでも21名を受け入れてきており、その数は全国の自治体の中で最大となっています。

開会式には、福島県知事や家畜改良センター理事長からもメッセージが送られました。そして20th Year of Service on Livestock and Poultry Development Towards Globalization というテーマで行われた大会では、フィリピン・日本両国から様々な講演や研究・事例発表が行われ、今後のフィリピン畜産の発展と両国の技術的連携の強化について活発な意見交換がなされました。

翌2日には農業総合センター畜産研究所の視察を行いました。来日したフィリピン人の中には過去に当場で研修を受けた人もおり、彼らが懐かしさに目を潤ませる一幕もありました。



今後は会場としても世界的な視座に立った研究が求められる時代であると、実感させられる大会でした。

（沼尻分場 前田）

## 早期放牧育成について



乳用後継牛の育成確保は、酪農経営の基盤強化に直結するものですが、現状では、育成にかかる労力軽減などから、外部導入に頼る傾向もみられ、コスト増や疾病侵入のリスク発生も見られます。また、近年、転作田など地域の遊休地等増加から、その有効活用が強く求められています。

そこで、当研究所では、遊休農地を有効に活用した放牧育成技術や、哺乳ロボットなど新技術を活用した育成管理技術を確立することを目的として、育成放牧に関する意向調査、並びに早期の放牧開始をめざした放牧開始月齢の検討を行っていますので、これまで得られた成果について紹介します。

意向調査結果から、酪農家の意向として、放牧による栄養面等の不安がある一方で、足腰の強化、給餌の省力化など放牧への期待が示されました。

また、放牧開始月齢を検討する試験の結果から、2ヶ月齢・3ヶ月齢からの早期放牧においても、放牧による生草の自由摂取と併給飼料（育成期配合飼料）を給与することにより十分な栄養摂取が可能であり、標準発育と同等の発育を得ることができました。

このことは、栄養面等で不安のあった未放牧農家等の放牧への関心の高まりが期待されるとともに、牛舎周辺に遊休農地が存在する酪農経営にとって、農場運営方針の選択肢が広がり、遊休農地の有効活用につながるものと考えられます。

（酪農グループ 中村）

## 農業総合センターまつり畜産研究所 会場を開催しました

8月25日(土)、26日(日)の両日、好天に恵まれ畜産研究所の一般公開を行い、日曜日は、県酪農協主催の酪農まつりも同時に開催されました。2日間で約6,600人もの来場者がありました。

今後も畜産の理解促進に向けて開催しますので、皆様の御協力をお願いします。



## 中学生が職場体験！

畜産研究所では、福島市教育委員会主催の「地域に学ぶ職場体験活動事業」により毎年中学生を受け入れています。今年は福島市内の中学校5校から、男子1名、女子8名の中学生がそれぞれ5日間の研修に望みました。体験では、肉用牛・乳用牛の世話、搾乳体験や畜産の現状などについて学んで頂きました。

今後も、中学生を積極的に受入して、畜産への理解者を増やしていきたいと思ひます。

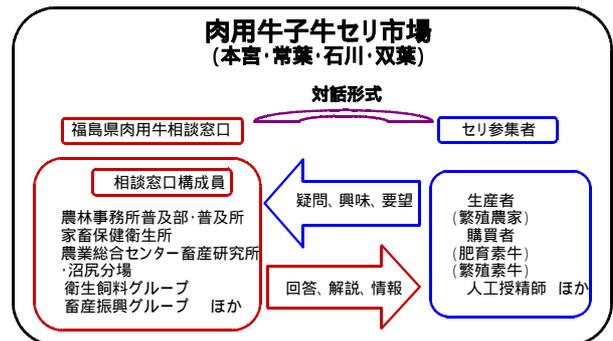


中学校	時 期	人数
福島第三	6 / 25 ~ 6 / 29	2名
福島第一	7 / 2 ~ 7 / 6	1名
信 夫	7 / 2 ~ 7 / 6	2名
信 陵	9 / 3 ~ 9 / 7	2名
福島第四	9 / 3 ~ 9 / 7	2名

(動物工学グループ深谷)

## 肉用牛相談窓口「ハロー福島牛」！！

従来から実施している各種の情報提供などの啓発普及活動の他に、肉用牛農家を始めとするセリ市場参集者との肉用牛経営に関する意見交換や問題解決のための相談活動ができる場が求められていました。このため新たな交流の機会を創出する場として、6月から県内の肉用牛子牛セリ市場において、福島県肉用牛相談窓口「ハロー福島牛」が開設されています。



この「ハロー福島牛」は生産流通領域畜産振興グループが中心となり、上記の相談窓口構成員の職員が県内各地のセリ市場で活動しています。

私たち畜産研究所の職員も積極的に協力しています。

(肉畜グループ 鎌田)

## 畜産研究所だより第6号

編 集 畜産研究所編集・図書委員会

発行者 福島県農業総合センター畜産研究所  
福島市荒井字地蔵原甲 18 番地

TEL(024)-593-1096 (総務担当)

FAX(024)-593-4977

E-メール: nougyou.tikusan@pref.fikushima.jp

ホームページ: <http://www.pref.fukushima.jp/chikusan-shiken/>